

平成22年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

児童の生活や教科等で学習したことがらを題材に、伝え合うことの楽しさや大切さが実感できる指導内容や指導方法に関する研究を深め、主として英語を用いてお互いがよりよく分かり合うためのコミュニケーション能力の素地を養う教育課程の研究開発をする。

2 研究開発の概要

本研究では、ことばに関する知識や技能を身に付け、目的や相手、状況等に応じて適切かつ効果的にことばを用い、主として英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとする資質や能力の素地の育成のあり方を探る。

具体的には、児童の生活や教科等で学習したことがらなどの題材で、自分の思いや考えをもたせるための話し合い活動や、外国人や先生、友だち等と伝え合う活動を取り入れる指導過程の工夫をする。

ことばコミュニケーション科においては、小学校6年間を見通し他教科等と関連を図りながら系統的に単元を構成し、自他に対する理解を深め、伝え合い、認め合い、よりよい人間関係を築くためのコミュニケーション能力の素地を養う教育課程の研究開発を行う。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

児童の生活や教科等で学習したことがらと関連した題材をもとに、主として英語を用いた言語活動を通して、思いを伝え合う楽しさを味わわせる指導の工夫をすれば、進んで自分の意思をことばで表現するとともに、相手の思いや考えを理解し、互いをよりよく理解し合うためのコミュニケーション能力の素地が養われるであろう。

(2) 教育課程の特例

小学校第1学年から全学年を見通したことばコミュニケーション科の教育課程を実施する。

- ①第1・2学年では、各教科・領域（国語科・算数科・生活科・音楽科・図画工作科・特別活動）から、週当たり1時間（第1学年年間34時間、第2学年年間35時間）を「ことばコミュニケーション科」の授業に充てる。
- ②第3学年では、各教科・領域（国語科・理科・音楽科・総合的な学習の時間）から、週当たり1時間（年間35時間）を「ことばコミュニケーション科」の授業時数に充てる。
- ③第4学年では、各教科・領域（国語科・音楽科・体育科・総合的な学習の時間）から、年間45時間を「ことばコミュニケーション科」の授業時数に充てる。
- ④第5・6学年では、各教科・領域（社会科・家庭科・外国語活動・総合的な学習の時間）から、年間50時間を「ことばコミュニケーション科」の授業時数に充てる。そのうちの10時間を「読むこと」や「書くこと」の指導に充てる。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

①教育課程編成の基本方針

- ア ことばコミュニケーション科の授業は、題材を児童の生活や教科等で学習したことがらから取り入れ、児童が「伝えたい」「思いをわかってほしい」と思える必然性を重視した構成にする。
- イ ことばコミュニケーション科では、国語の「話すこと・聞くこと」をはじめ教育活動全体と関連させて授業を行う。特に、発音・発声、スピーチ、話し合いなど、相手を意識し自分の思いを相手に伝えるために必要な態度や技能を育てる。
- ウ 道徳や特別活動などに関連させ、自分や相手の良さを認め、自分の行動に取り入れ自分を高めようとする態度を育てる。
- エ 単元に必要な、児童に身に付けさせたい語彙や英語表現を明らかにし、学年ごとに系統的に年間指導計画に位置づける。
- オ 他者と関わる機会を増やし、よりよい関係を築く力を身に付けさせるために、計画的に外国人や地域の人、異学年児童と交流する場を設定する。

②教科の目標

主として英語を用いた活動を通して、児童の生活や教科等の学習体験を生かした伝え合いの楽しさを味わわせるとともに、よりよく人と関わろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養う。

③各学年の目標及び内容

[第1学年及び第2学年]

ア 目標

- (1) 先生や友だちと一緒に、主として英語を用いた活動に親しみ、コミュニケーション活動を楽しもうとする態度を育てる。
- (2) 相手の話を最後まで聞き、わかるようにはっきりと話すようにする。
- (3) 自分と相手の違いに気付くようにする。

イ 内容

- A コミュニケーションへの関心・意欲・態度
- ・簡単なあいさつをすること。
 - ・歌やゲーム等のコミュニケーション活動をする。
 - ・先生や友だちに話しかけていく活動をする。
- B 聞くこと・話すこと
- ・相手の話を最後までしっかりと聞き取る活動をする。
 - ・みんなに聞こえる声で最後まではっきり話す活動をする。
 - ・相手の質問に、答えること。
- C 認め合い
- ・自分や友だちのがんばりに気付くこと。
 - ・先生や友だち、ALTに関わる新たな発見をすること。

[第3学年及び第4学年]

ア 目標

- (1) 友だちや先生と、主として英語を用いた活動を通して、意欲的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
- (2) 相手の話の内容を予想しながら聞き、伝わるように話すようにする。
- (3) 自分や相手のよさや頑張りに気付き、個性を尊重しあうようにする。

イ 内容

- A コミュニケーションへの関心・意欲・態度
- ・場に応じたあいさつをすること。
 - ・歌やゲームや活動を通して、楽しくコミュニケーション活動をする。
 - ・友だちや先生に、進んで話しかけていく活動をする。
- B 聞くこと・話すこと
- ・相手の話の内容を、ことばや表情や動作から聞き取る活動をする。
 - ・相手を意識して、相手に伝わるように話す活動をする。
(声の大きさ、スピード、間)
 - ・質問したり答えたりすること。
- C 認め合い
- ・自分や相手のよさや頑張りに気付くこと。
 - ・友だちや先生、ALTに関わる新たな発見をすること。
- D 話し合い
- ・友だちの考えを最後まで聞き、それに対する自分の考えを話すこと。
 - ・誰とでもグループ活動ができるようにすること。

[第5学年及び第6学年]

ア 目標

- (1) 様々な人と、主として英語を用いた活動を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
- (2) 相手の話の内容を受け止めながら聞き、伝わるように工夫して話すようにする。
- (3) お互いの違いを認め合い、高め合おうとする。

イ 内容

- A コミュニケーションへの関心・意欲・態度
- ・場に応じた適切な表現を使ってあいさつをすること。
 - ・歌やゲームや活動を通して、積極的にコミュニケーション活動をする。
 - ・相手の気持ちをくみ取りながら、様々な人に、積極的に話しかけていこうとすること。
- B 聞くこと・話すこと
- ・相手の思いや願いを推測し、自分と比べながら聞き取る。
 - ・相手を意識して、相手によくわかるように、工夫して話すこと。
(声の大きさ、スピード、間、強弱、抑揚等)
 - ・相手の思いや願いを理解し、会話を続ける活動をする。

C 認め合い

- ・自分や相手のいろいろなよさや頑張りに気付くこと。
- ・様々な人に関わる新たな発見をし、お互いの文化を尊重し合うこと。

D 話し合い

- ・相手の立場や意見を大切にしながら、問題解決のために協力して話し合うこと。

E 読むこと・書くこと

- ・コミュニケーションに必要な英語の文字を見て発話すること。
- ・コミュニケーションに必要な単語を書き写すこと。

④一単元の指導過程例

ことばコミュニケーション科では、課題提示、話し合い活動、伝え合い、認め合いをはじめとする基本的な指導過程を設定している。以下の表は、第6学年「修学旅行の楽しさを伝えよう」の指導過程を示したものである

□…教師

○…児童

活動過程	児童の活動	ALT, HRTの支援
課題をなげかける	「修学旅行に行ったよ」 「エミリー（ALT）は行ったことがないんだね」	「修学旅行に行ったの？」 「楽しかった？」 「みんなの好きなアトラクションを教えて」（ALTの願い）
課題を受けとめる	「いいよ」「教えてあげよう」	
解決方法を考える	「どうやって伝えようか」 ・伝えたいアトラクション ・方法 ・言語媒体(日本語? 英語?)	・伝えたいアトラクションごとに班を作る。 ・ワークシートに個人の考えを書かせる。
自分なりの考えをもつ	「どんな伝え方をしたらわかるかな」 ・絵やジェスチャー ・工作 ・実際に動く ・英語で伝える	
友だちと練りあう	「班で話し合おう」	・班で考えを出し合い、表現方法を話し合う。
表現する	「英語ではどう言うのかな」 「英語表現を教えてもらおう」 “Thank you!” 「わかったよ」 「発表の準備をしよう」 ・各グループで練習 ・認め合う ・アドバイス 「ALTに発表しよう」 「伝わったかな」	・既習の表現を使って、英語表現を考えさせる。 ・工作・動作のアドバイスをする。 ・わからない英語はALTやJTEに質問させる。 ・班で協力して練習させる。 ・班ごとに見せ合い、良いところを見つけたり、アドバイスをさせたりする。
受け取る	Yes!! It's fast. It's high.	Is it fast? Is it high? So cool! Nice.
伝わったことを評価する	「一番好きなものはどれ?」	OK. I understand. I like ~ best.
達成感を味わう	You are welcome!! 「伝わった!!」	Thank you!!
認め合う	「〇〇さんは、私が困っていたときに助けてくれたよ」 「嬉しかったよ。ありがとう」	・友だちのよさやがんばりを認め合わせる。

質問

質問

⑤指導計画の作成と内容の取り扱い

指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

- (1) ③の各学年の内容の指導については、必要に応じて当該学年より前の学年の内容の復習をしたり、補充学習をしたりして、弾力的に指導すること。
- (2) ③の各学年の内容の「E読むこと・書くこと」に関する指導では、第5学年及び第6学年で、歌詞を見ながら歌ったり、ポスター作成等で、既習の英単語を使ったり、調べたりして書き写すことに、年間10時間程度を配当すること。

⑥教育課程表（別紙1）

(2) 研究の経過

年次	実施内容等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ○研究の全体構想（目標・内容・方法）の明確化と研究組織の確立 「伝え合う力」や「ことばコミュニケーション科」の共通理解 ○新設教科ことばコミュニケーション科のカリキュラムに基づく授業の実施 ○教育課程全般にかかわる改善 ○ことばコミュニケーション科における観点及び評価規準の検討 ○公開授業による検証（年間30日以上） ○4年生以上の児童を対象に「児童英検」の実施 ○小中合同研修会の発足 ○第4回荷揚町小ワークショップの開催
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ○研究内容、方法の修正 ○指導過程と系統的な指導計画の検討 ○各種アンケート結果からの児童の変容の分析 ○中間発表会での検証授業の成果と課題の明確化 ○評価方法の検討、分析と指導内容の改善 （評価規準の見直し、振り返りカード、アンケート、ポートフォリオ、リスニングテスト） ○小中合同研修会の定例化、研修、情報交換 ○公開授業による検証（年間30日以上） ○第5回荷揚町小ワークショップの開催（7月）
第3年次 （本年次）	<ul style="list-style-type: none"> ○運営指導委員会による教育課程および研究推進全般に係る話し合い ○教育課程実施上の改善点の明確化 ○総括発表会の実施 ○各種アンケート結果からの児童の変容の分析 ○評価方法の検討、分析と指導内容の改善 （評価規準の見直し、振り返りカード、アンケート、ポートフォリオ、リスニングテスト） ○研究の成果と課題のまとめ、今後の見通し ○小中合同研修会の定例化・研修・情報交換 ○公開授業による検証（年間30日以上） ○第6回荷揚町小ワークショップの開催（7月）

(3) 評価に対する取組

年次	評価方法等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ○公開授業の指導内容や児童の学びの様相についての参観者による評価 ○子どもの変容による評価 <ul style="list-style-type: none"> ・仮説の視点からの姿 ・評価規準（具体的な子どもの姿）からの評価 ・児童の自己評価、相互評価（各授業後） ・保護者のアンケート実施による意識調査（2月） ○検証授業の評価の視点 <ul style="list-style-type: none"> ・ねらいや仮説の視点からの評価 ・授業記録の分析 ・参観者のアンケート分析からの評価 ・抽出児童の記録分析からの評価 ○学校評価の視点 <ul style="list-style-type: none"> ・保護者や地域からの評価（オープンスクールでアンケート実施、年5回） ・公開授業参観者からの評価（年30回） ○「児童英検」結果からの評価（2月、第4～6学年対象） ○運営指導委員会による研究内容及び推進全体についての評価

第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ○公開授業の指導内容や児童の学びの様相についての参観者による評価 ○子どもの変容による評価 <ul style="list-style-type: none"> ・仮説の視点からの姿 ・評価規準（具体的な子どもの姿）からの評価 ・児童の自己評価，相互評価 ・保護者のアンケート実施による意識調査（2月） ○検証授業の評価の視点 <ul style="list-style-type: none"> ・ねらいや仮説の視点からの評価 ・授業記録の分析からの評価 ・参観者のアンケート分析からの評価 ・抽出児童の記録分析からの評価 ○学校評価の視点 <ul style="list-style-type: none"> ・保護者や地域からの評価（オープンスクールでアンケート実施，年5回） ・教育関係者（参観者）からの評価（公開授業年30回，中間発表会11月） ○リスニングテスト結果からの評価（2月，全学年対象） ○中学校生徒および教師対象の意識調査（6・2月） ○運営指導委員会による研究内容および推進全体についての評価
第3年次 (本年次)	<ul style="list-style-type: none"> ○公開授業の指導内容や児童の学びの様相についての参観者による評価 ○子どもの変容による評価 <ul style="list-style-type: none"> ・仮説の視点からの姿 ・評価規準（具体的な子どもの姿）からの評価 ・児童の自己評価，相互評価 ・保護者のアンケート実施による意識調査 ○検証授業の評価の視点 <ul style="list-style-type: none"> ・ねらいや仮説の視点からの評価 ・授業記録の分析からの評価 ・参観者のアンケート分析からの評価 ・抽出児童の記録分析からの評価 ○学校評価の視点 <ul style="list-style-type: none"> ・保護者や地域からの評価（オープンスクールでアンケート実施，年5回） ・教育関係者（参観者）からの評価（公開授業年30回，3年次発表会10月） ○リスニングテスト結果からの評価（11月） ○中学校生徒対象の意識調査（7月） ○運営指導委員会による研究内容および推進全体についての評価

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

①児童・生徒への効果

○学習意欲の向上

- ・児童の生活や教科等と関連させた内容の題材を授業に仕組むことで、「ALTに伝えたい」「知らせたい」などの意欲を生み出し、既習学習を生かして自信をもって取り組むことができた。
- ・児童が発表するとき、ALTがうなずいたりあいづちをうったりするなど、児童との間に意思疎通を図ることにより、お互いに理解しようとしたり、自分から積極的にALTに話しかけたりする児童の姿が見られた。

○知識・理解の向上

- ・基本となる英文を板書することにより、児童は文字を見て発音を推測したり、規則性に気付いたりすることができた。
- ・11月、本校作成のリスニングテストに全学年が取り組んだ。thirsty, eraser など、児童にとって比較的聞き取りにくいと思われる単語であっても、日頃の授業で扱う頻度が多かった学年は正答率が高かった。また、英単語や会話の聞き取りに加え、相手の気持ちを考える問題を盛り込んだ。この問題では正解率が100%に近く、相手の様子から気持ちを推測する力が付いている。

○思考・判断・表現力の向上

- ・話し合い活動を取り入れたことで、課題を全員で確認することができ、一人では気付かなかったよりよい考えに気付いたという喜びが経験できた。さらに、相手に理解してもらおうと、今まで習得した知識を駆使し、自信をもって自分の考えを伝えた。みんなで協力して、一つの課題について話し合うことで連帯感が生まれ、友だちのよさや頑張りに気付くことができた。

- ・児童は、ALTに伝える活動で、ジェスチャーや絵などを使って英語を補おうとする姿が見られた。また、知らない英語は、他の単語を組み合わせることで何とかして伝えようとする意欲が見られた。そのときにALTから正しい英語を教えられると、児童の英語の定着率が高かった。

○生活面の変化

- ・授業の中で相互評価する場を設けることで、お互いを認め合い、高め合おうとする姿が見られた。また、ALTの生活習慣や友だちに関する新たな発見などについての発言も見られ、国際理解・相互理解につながった。ことばコミュニケーション科の授業だけでなく、学級活動や帰りの会などでお互いのよさを認め合う姿が多く見られるようになった。

②教師への効果

○授業力の向上

- ・ことばコミュニケーション科と他教科とを関連させた教材を新たに開発することは、教育課程編成上欠かすことができない活動である。それは、教師の教材の特質を見抜く力によることが大きい。今年度は、各学年とも、数単元新たに教材開発ができた実績を見ると教師に教材を開発していく力、新たに生み出す力が付いてきていると言える。単元の構成も児童や学級の実態に即したものであり、担任でなければ考えつかない効果を発揮することができた。
- ・教員対象に実施したアンケートによると、100%の職員が「児童は伝え合うことの楽しさや大切さを感じる事ができた」「児童のコミュニケーション力は育ってきている」と答えている。授業の中でも、課題解決学習やコミュニケーションの場を設定する等の授業改革に取り組み、児童の聞く・話す力を日常的に培っていかうとする意識も強化された。
- ・本校を転出した大部分の教員が、赴任先で外国語活動担当となり、本校で取得した指導方法を広めている。それぞれの学校で、授業計画やALT申請計画などを中心となって行い、積極的に外国語活動に取り組んでいる姿が見られる。

○教材開発と授業改善

- ・JTE・HRT・ALTの三者の役割分担が明確になった。特に検証授業や公開授業の際、教材開発、指導案作成をすべてHRTが実施した。HRTは、それぞれの特技を生かして、JTEはともに作成者としてプロジェクトに入り、支援していった。ALTとの打ち合わせをHRTが直接することができたことで、検証授業をHRTの計画通りに進めることができた。このALTとの取り組みが、HRTに自信をもたせ、HRTが一人でも授業を進められるようになったことは大きな成果である。
- ・HRTは、ことばコミュニケーション科の課題提示、考える過程・話し合いの場の設定などの指導過程を他教科にも発展・転化させ、授業の改善に取り組むようになった。

○同僚性の向上

- ・ワークショップや年間30回以上の公開授業を実施することにより、教員の協力体制が確立した。ワークショップでは、本校の職員が、それぞれ役割分担をし、クラスルームイングリッシュを使いながら、ALTと一緒に歌やゲームなどのデモンストレーションを行った。お互いに見合い、アドバイスをしながら練習やリハーサルを重ねた。それぞれの役割をやり遂げたことで、自分の意欲や自信につながった。公開授業では、参観者から授業後に感想をもらい、それをもとに授業改善を行った。感想には、「自分から『話したい! 話そう』という気持ちがあって、すばらしいと思う」「気分的にリラックスしているようで、活動の時間、英語を話すことを楽しんでいる姿が見られた」「JTEとHRTの関わり方がよくわかった。担任が子どもの実態を把握しながら、担当者と一緒に進めていくという形がよかった」などがあった。

③保護者等への効果

○子育て意識

- ・家庭でのコミュニケーションについてアンケートを実施した。このアンケートから、保護者が子どもに対してコミュニケーションを取ろうとしている姿が明らかになり、家庭でも伝え合い、認め合いができていくことがわかる。
- ・オープンスクールや授業参観では、保護者はことばコミュニケーション科に対して関心が高く、コミュニケーションの重要性から、今後とも是非続けてほしいという意見が寄せられた。

○学校への協力姿勢

- ・保護者は、本校のことばコミュニケーション科について理解を深めてくれており、協力をしようとする体制ができた。研究発表会では、のべ100名の保護者が校内美化や大会運営に協力したり、授業を参観したりした。

○子ども理解

- ・ことばコミュニケーション科通信「スマイル」やホームページを活用し、全学年のことばコミュニケーション科の活動内容を保護者に知らせている。これにより今までは自分の子どもの授業しか知らなかった保護者も他学年がどんな事をしているのか知ることができるようになり、学習内容が家庭の話題になることが多くなっている。

○地域連携

- ・地域の方々も興味・関心を寄せており、毎回のことばコミュニケーション科の授業を参観するのを楽しみにしてくれている。中には、自分も児童と一緒に学ぼうとする方もおり、自分たちの子どもの頃の教育と比べて、「こんな英語教育を受けたかった」という声もよせられた。今後のことばコミュニケーション科の取り組みに期待を寄せている様子が伺える。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

① 日常の授業における児童の「伝え合い」の姿の実現

「話す」ということについては、自分の考えをもち、話し合いの中でも意見を言うことができている。ただ、お互いの意見の聞き合いについてはまだ不十分で、相手の話の内容を表情や動作から考えながら聞いたり、自分の考えを比べながら聞いたりすることができていない。英語を使う場面だけでなく、学級でも、すべての教科・領域の中で相手意識をもって聞き合うことが課題である。また、イングリッシュタイムを計画的・継続的に実施し、聞く・話す活動を日常化したり、発表会でお互いの表現を見合ったりする機会をもつことにより、日頃から伝えることができたり、お互いのよさを認め合ったりする喜びを実感させることが必要である。

② 伝える相手と方法の開発

ALTに伝える活動を仕組んでいるため、ALTが授業に来ることが前提となっている。だがALTが来校しない場合でも、ALTが来るときに向けて授業を進めることにより、ことばを用いて伝え合う必然性を維持することができる。担任中心に、電子黒板やパソコン、DVDなどの情報機器を活用することで、それを補うことができると考える。また、ALT以外に校区内の外国人や留学生などを活用することも考えている。

③ 保護者への啓発

ことばコミュニケーション科について保護者の関心は高まっているが、その意義や目的などについては、これからも継続して発信し続けていく必要がある。学校便り、ことばコミュニケーション科通信、ホームページ等で情報を発信すると共に、PTA、オープンスクール等の機会に保護者や地域の方々に授業を参観してもらい、理解を深めていく。また、家庭でも家族のコミュニケーションの機会が増えるように働きかけ、学校と家庭とが協力して児童のコミュニケーション能力の育成に取り組んでいく。

④ 教職員研修

研修を進めた結果、各教員は、ことばコミュニケーション科についての理解を深め、授業力を高めることができた。来年度以降も、外国語活動ワークショップや年間30日以上での公開授業など通して、より一層、教員の意識向上と資質向上に取り組んでいくことが必要である。

⑤ 小中連携の推進

本校の中学校の校区には、本校を含めて3校の小中学校がある。以前は、卒業後はほとんどの児童が同じ中学校に進学していたが、ここ数年は、学校選択制度のもと、地元中学校の進学が割合的に少ない。そのため、本校の卒業生は、他校出身者に押され、ことばコミュニケーション科での積み重ねられた経験があるにも関わらず、十分に伝え合いの意欲や力を発揮し広めることができていない実態がある。

そのため、小中連携や小小連携を推進し、中学校進学時のギャップを解消したり、他校と学習のスタートをそろえたりする必要がある。また、本校のことばコミュニケーション科の活動を中学校へとつなげ、コミュニケーション能力を伸ばしていくためには、小学校中学校での英語の授業交流や、互見授業、情報交換を通じて、より一層の連携を進めていくことが求められる。

大分市立荷揚町小学校 教育課程表 (平成22年度)

	各教科の授業時数									道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	ことばコミュニケーション科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育						
第1学年	257 -15	/	135 -1	/	95 -7	65 -3	61 -7	/	102	34	/	/	33 -1	34	816
第2学年	269 -11	/	175	/	85 -20	70	66 -4	/	105	35	/	/	35	35	875
第3学年	221 -14	67 -3	175	88 -2	/	59 -1	60	/	90	35	/	80 -15	35	35	945
第4学年	216 -19	85	175	105	/	59 -1	60	/	88 -2	35	/	77 -23	35	45	980
第5学年	180	90	175	105	/	50	50	58 -2	90	35	0 -35	62 -13	35	50	980
第6学年	175	97 -3	175	105	/	50	50	55	90	35	0 -35	63 -12	35	50	980
計	1318	339	1010	403	180	353	347	113	565	209	0	282	208	249	5576